

京都府亀岡市池尻廃寺出土瓦の検討

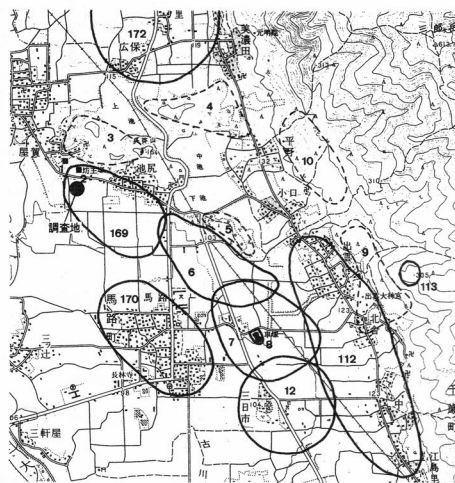
柴 暁彦

1. はじめに

池尻廃寺は京都府亀岡市馬路町小字池尻に所在する。この廃寺の立地は、亀岡盆地を南流する桂川(大堰川)左岸の段丘上で、また、この河川に注ぎ込む小河川、三俣川の扇状地に当たる(第1・7図)。従来、亀岡盆地右岸域では桑寺廃寺、興能廃寺といった白鳳期の寺院跡が確認されていたが、左岸域では調査地周辺で須恵質の瓦が表採されていたこと以外、寺院の存在を示す基壇状の高まり等も認められなかったため今回が新たな発見となった。左岸域は奈良時代には古山陰道が通っていたと研究者の間では言われており、このことを裏付ける場所で見つかったこと、出土した瓦が本薬師寺式系の系譜をひくものであることから、南丹波のこの地からも藤原宮の造営に際して工人の徴発が行われたことが明白であり、池尻廃寺出土瓦と本薬師寺出土瓦との比較検討を試みたものである。

2. 調査の概要(第2図)

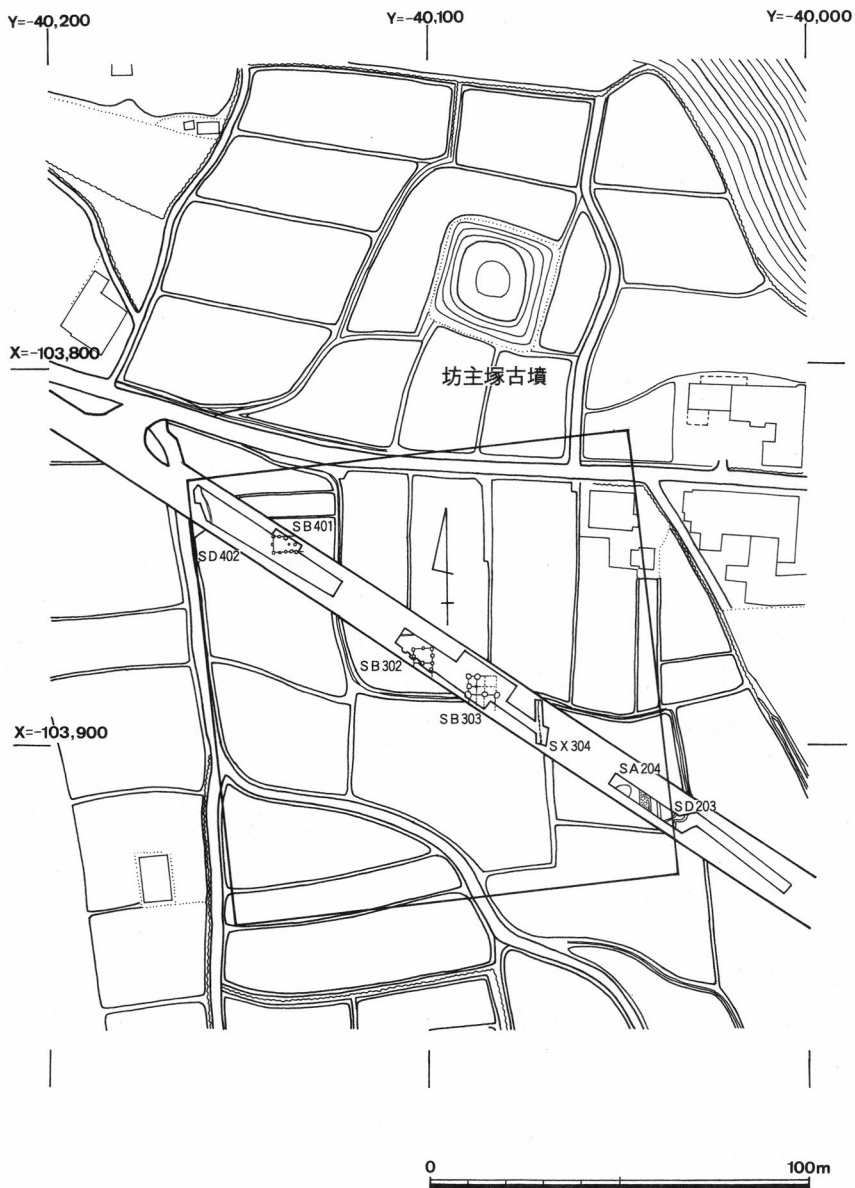
調査は府道亀岡・八木・園部線の改良工事に伴うものである。調査は平成3年度に路線東側について主に行い、西側である八木町に接する部分は遺構・遺物の有無について試掘調査を行った。その際、八木町との境界に程近い部分で幅約2.5m、深さ約0.4mを測る、南北方向の溝跡を検出した。この溝跡からは凸面格子叩き、縄叩きの平瓦や四重弧文軒平瓦などが出土しており、白鳳期の何らかの建物施設の存在の可能性が唱えられた。その時点では、八木町側に微高地が展開するという周辺地形等か



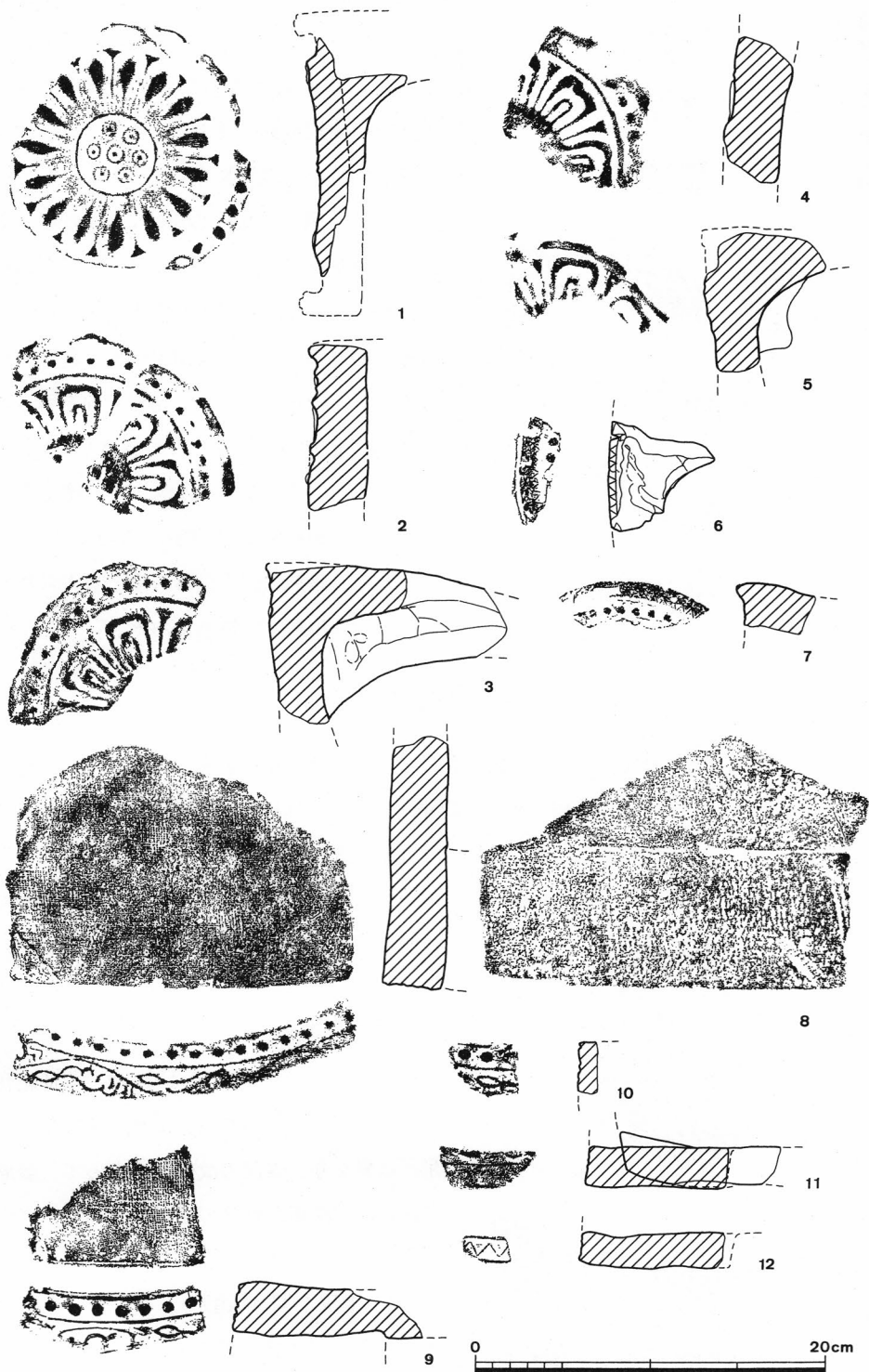
第1図 調査地と周辺の遺跡(1/50,000)

- | | |
|----------------|-----------|
| 1. 天神塚古墳 | 2. 坊主塚古墳 |
| 3. 池尻古墳群 | 4. 美濃田古墳群 |
| 5. 稲葉山古墳群 | 6. 時塚遺跡 |
| 8. 千歳車塚古墳 | 9. 出雲古墳群 |
| 10. 平野古墳群 | 112. 出雲遺跡 |
| 169. 池尻遺跡(調査地) | |

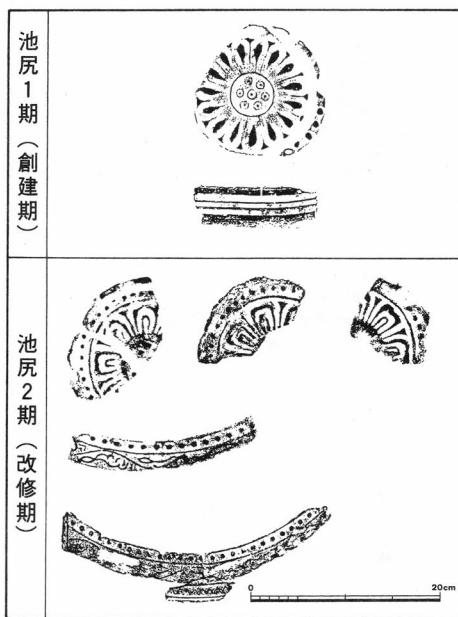
ら八木町側に広がる官衙などの東限の区画溝と考えられた。そしてこの結果を受けて、平成5年度に本調査を行ったところ、前回確認された溝跡(S D402)から東側に約110数mの場所に同規模の溝跡(S D203)を検出した(第2図)。前回調査の推定と反対側に展開した、この約1町四方の区画は坊主塚古墳をほぼ中心に置いて東西に展開している。その坊主塚古墳の正面には礎石建物跡(S B303)が見つかり、この礎石建物跡の西側では、2棟の掘立柱建物跡(S B302・S B401)を検出した。また、礎石建物跡の東側では、南北方



第2図 調査トレンチ配置図(太枠は寺域推定範囲) (注3文献に加筆)



第3図 軒瓦実測図(注3文献)



第4図 軒瓦分類図
(注3文献を改変して作図)

向に並ぶ基壇状の石列(S X 304)を確認した。なお、既概要報告^(注3)では特に触れなかったが、中心と思われる礎石建物跡(S B 303)の周辺部分に集中して大小様々な大きさの鉄釘などの鉄製品が20数点出土していること、調査地付近の小字に「高戸」(講堂の意味か?)が残ることから^(注3)見ても、何らかの重要建物であったことは間違いないと思われる。また、東限の溝跡(S D 203)の約5m内側には、約2m幅で磔を叩き締めた南北方向の築地状の磔敷き(S A 204)が見られ、その0.7m東側には、磔敷きに平行する幅約0.6mの溝跡が存在していた。これは、築地に伴う雨落ち溝と考えられる。以上が検出遺構の概略である。

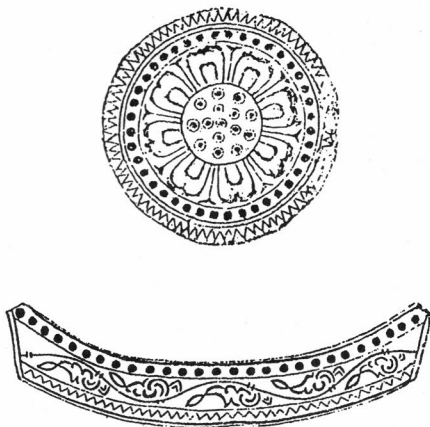
3. 出土した瓦について(第3・6図)

出土した瓦は大きく軒瓦と平瓦、丸瓦に分けられる。その中で軒丸・軒平瓦は瓦当の文様から創建瓦と改修期の瓦に分類できる。創建瓦は当廃寺独自の軒瓦であり、改修にあたって藤原宮式の瓦が採用されている。また、平瓦と丸瓦は明確には分類不可能かもしれないが、おおよそ、凸面の文様が格子叩きのものが縄叩きのものより先行すると思われる。以下に瓦の分類を試みる。

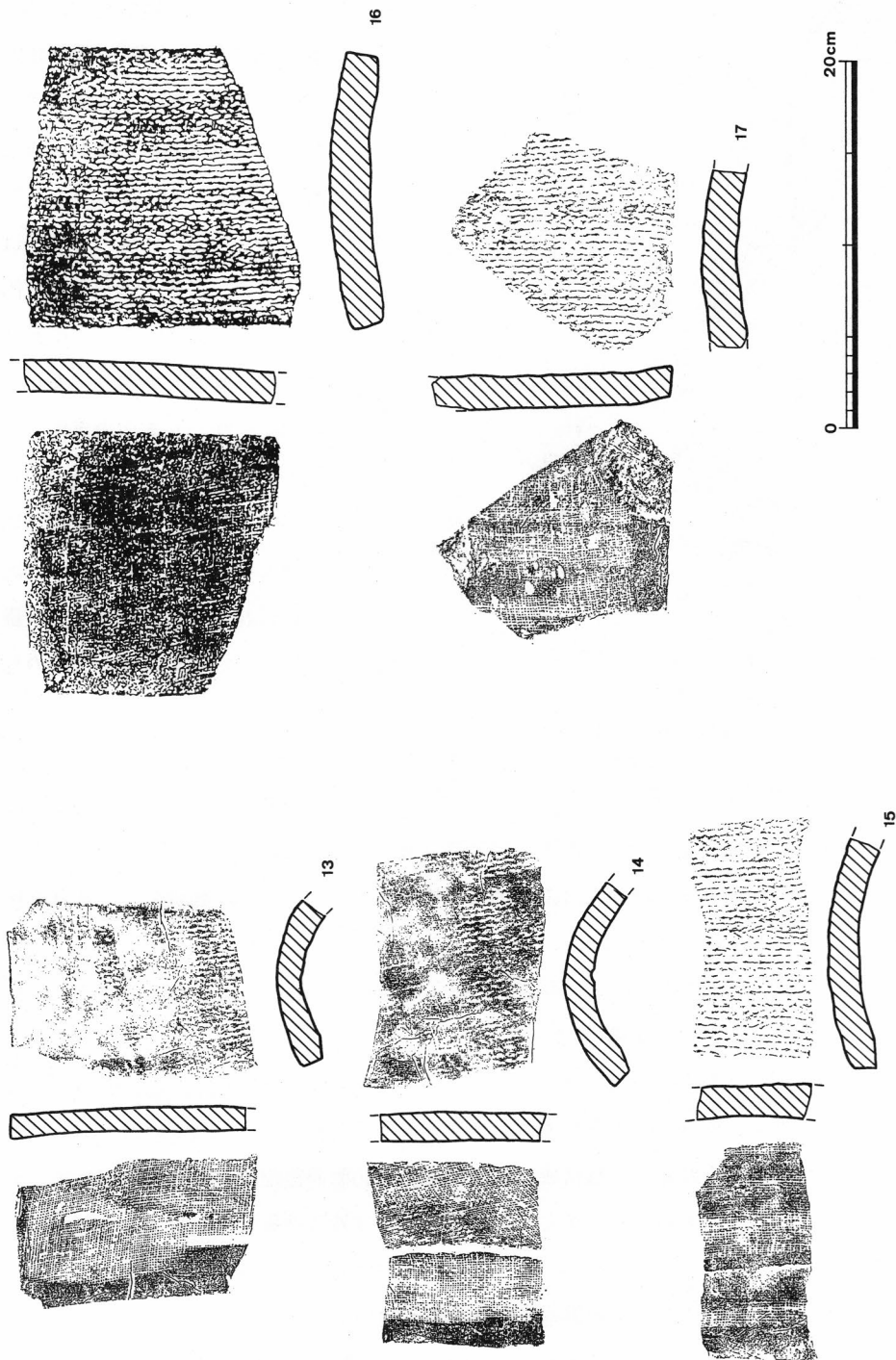
1. 軒瓦

畿内及びその周辺地域において、7世紀代に創建された寺院の瓦は、大半が藤原宮式の瓦とは異なり、寺院の改修にあたって、藤原宮式の瓦が採用されるのが通例であり、当廃寺においても例外ではない。

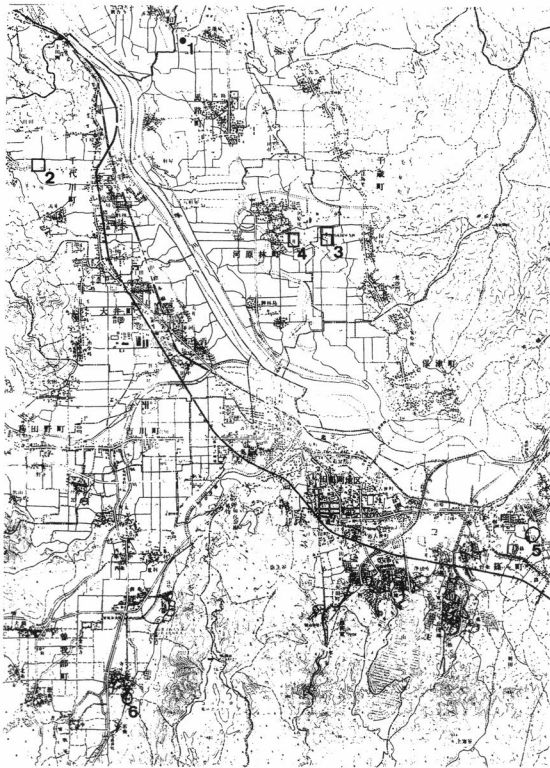
1-a 池尻1期(創建期) 細弁十五葉蓮華文軒丸瓦と四重弧文軒平瓦のセット関係(第4図)



第5図 藤原宮出土軒瓦(坪之内文献による)
上:6121A型式、下:6647C型式



第6図 平瓦美測図



第7図 古代寺院位置図(1/100,000) (注3文献)



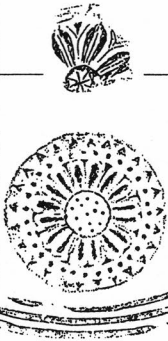
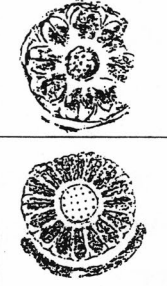


- | | | |
|-----------|----------|----------|
| 1. 池尻遺跡 | 2. 桑寺廃寺 | 3. 丹波国分寺 |
| 4. 御上人林廃寺 | 5. 観音芝廃寺 | 6. 與能廃寺 |

どちらも1点ずつ出土した。軒丸瓦は東限の溝跡(S D 203)、軒平瓦は西限の溝跡(S D 402)で出土した。細弁十五葉蓮華文軒丸瓦は外区外縁に30個前後の珠文を施し、内区には蓮弁及び間弁が15ある。中房内の蓮子は1+6で、各蓮子は突出した円圈をめぐらせている。この瓦は瓦当面で剥離しており、丸瓦部は出土せず、瓦当面の裏側に丸瓦との貼り付け粘土がわずかに残存する。この文様は類例を見ないもので、在地のものか、あるいは花卉の状況から見て新羅系の瓦の影響を受けたものの可能性がある。焼成は良好である。色調は淡褐色を呈している。外区外縁に珠文を施すものには、^(注4)大阪市天王寺区の四天王寺の瓦がある。四重弧文軒平瓦は須恵質の焼きで色調は青灰色を呈している。無顎である。凸面には部分的に斜格子叩きが見られる。類例として奈良県橿原市田中廃寺のものなどがある。^(注5)

1-b 池尻2期(改修期) 単弁八葉蓮華文軒丸瓦(6121A型式系)と変形忍冬唐草文軒平瓦(6647C型式系)のセット関係(第4・5図)

いずれも東限の溝跡(S D 203)から出土している。破片点数で軒丸瓦4点、軒平瓦6点がある。いずれも本薬師寺系の瓦である。単弁八葉蓮華文軒丸瓦は平城宮6121A型式系を模倣したものと考えられる。文様構成は外区に珠文を40個前後配するものと思われる。中房の蓮子は1+8と考えられる。また、須恵質の瓦には外区外縁に線鋸歯文、外区内縁に珠文を施すものが2点(第3図6・7)みられるが、内区部分の瓦当の出土がないこと、焼成が異なること、軟質のものは線鋸歯文が確認できないことから、同時期のものではない可能性がある。本薬師寺のものと同範瓦でないことは、外区外縁に界線が見られないこと、間弁、子葉のかたちが異なる、また、中房が全体に突出し、蓮子には突出した円圈が見ら

れないことなどの特徴から明らかである。変形忍冬唐草文軒平瓦は段顎で顎部分は別作りであり、顎部分を接合して成形後、瓦当箆を押し当てるものと思われ、出土資料の大半は、顎が剥離している(第3図8~12)。文様構成は、上外区は珠文、内区は変形忍冬唐草文、下外区は線鋸齒文である。この鋸齒文は界線には接しない。内区の変形忍冬唐草文は6647C型式に近似する。唐草文は右から左へ5回反転するものと思われるが、この逆のものも1点存在する(6646G型式系)。色調は黒灰色を呈しており、本薬師寺の瓦の胎土に類するが、同箆ではない。その根拠として本薬師寺の瓦は粘土板巻き付け技法に対し、当廃寺のものは粘土紐巻き上げ技法である。また、前者は凹面の布目痕跡をナゲ消すのに対し、後

| 池 尻 廃 寺 | 興 能 廃 寺 | 観 音 芝 廃 寺 | 桑 寺 廃 寺 | 古代寺院名 年代 |
|--|--|---|--|-------------|
|  |  |  |  | 700年 |
| | |  | | 800年 |
| | |  | | |

第8図 亀岡の古代寺院出土瓦(『亀岡市史』注1より転載)

者は布目痕跡がそのまま残っていることがあげられる。

2. 平瓦

2-a 格子目叩き平瓦

既概報で触れているが、凸面の格子叩きには正格子及び斜格子がある。概して正格子のものは、格子目が細かく、瓦の厚さが厚い。このためか焼成は不良で、色調は赤褐色を呈するものが大半を占める。この瓦の類例として、京都府船井郡八木町の殿若瓦窯のものが知られている。また、須恵質の焼きで厚さの薄いものは、京都府北桑田郡京北町の周山瓦窯^(注6)や同じく亀岡市千代川町の桑寺廃寺^(注7)で出土したものの中にもみられるが、これは南丹波地域に古くから見られる叩き文様であるが、時期的には奈良時代前半にはじまり、奈良時代後半以降まで残るものと考えられる。また、斜格子叩きは、やはり須恵質で厚さの薄いものが多いが、斜格子のなかで、格子目の粗いものは、亀岡市篠町の観音芝廃寺^(注8)で出土しているが、池尻廃寺での出土点数は10点未満と少ない。

2-b 縄叩き平瓦

縄の撚りが、右撚りものと左撚りものがある。従来通り叩き板上に縄原体を普通に巻き付けたものである。凸面に見られる縄の繊維圧痕の観察から、縄の原体は植物繊維でも比較的繊維の堅いものを使用していると思われる。焼成は須恵質の堅緻なものとし色が灰褐色をしたやや軟質のものが存在する。

2-b' 「ハ」字状縄叩き平瓦(第6図)

今回、藤原宮式軒瓦と合わせて注目することができる瓦である。縄叩きのなかでも特殊な1類である。本薬師寺では、平瓦の約6割がこの縄叩きの瓦のようであるが、池尻廃寺^(注9)では平瓦出土総量の1割未満で、完形品になるような個体は見られない。この瓦の文様は三つ編みにした縄原体を叩き板上に巻き付けたものと思われる。文様の比較をすると、本薬師寺のものは、縄の撚り自体が弱い、池尻廃寺出土のものは撚りが、非常に緻密である。凸面は撚りの強さの相異の問題だけであるが、製作技法は本薬師寺のものは、粘土板桶巻き作りであるのに対し、池尻廃寺のものは、粘土紐桶巻き作りという相違がある。また、凹面は本薬師寺のものは布目圧痕をナデ消しているのに対し、池尻廃寺のものは、布目圧痕をそのまま残すというような調整の省略がみられる。以上のように凸面の縄叩きの原体においては共通性が認められるが、細部では、製作技法が大きく異なり、本薬師寺の瓦工人のほうが丁寧な仕事をしているといえ、本薬師寺の瓦製作技法そのものの伝播はなかったものと考えられる。

4. まとめ

今まで藤原宮式の瓦の出土は亀岡盆地では、大堰川右岸に位置する與能廃寺が知られていたに過ぎない(第7・8図)。発掘調査はされておらず、採取されたとされる軒丸瓦1点と採取された軒平瓦2点があるのみである。^(注10) 軒丸瓦は外区外縁線鋸齒文、外区内縁珠文の複弁八葉蓮華文(6276型式系)、軒平瓦は上外区が珠文、内区主文が偏行唐草文、下外区が線鋸齒文のもの(6641H型式系)である。今回の池尻廃寺の調査によって、亀岡市の大堰川左岸でも、本薬師寺系の瓦を出土する寺院跡が確認された意義は非常に大きい。しかし、先にも述べたように、本薬師寺出土の瓦を実見した結果、軒瓦、「ハ」字状縄叩き平瓦とも文様面では一部で共通点が見られるものの、同範ではないことが明らかになったが、池尻廃寺にかかわった瓦工人は藤原宮の造営に際して集められた人びとであったことは間違いない。その中で、「ハ」字状縄叩きの平瓦は、現在のところ、本薬師寺以外では当廃寺例以外、出土が確認されていない。この点に関しては、池尻廃寺の瓦工人が造宮時の派遣先において、本薬師寺の瓦工人と接触が見られたことが考えられる。実際には坪之内徹の論考にあるように本薬師寺系の瓦を出土する畿内周辺地域の寺院跡でも出土している可能性はある。平瓦凸面の文様は、それ自体扱われにくい問題であるため、今まで比較対象となりやすい、軒瓦の文様の検討にとらわれてきた結果であるといえる。今後、軒瓦の文様と合わせて、平瓦凸面の叩き文様にも目を向けることで、本薬師寺の瓦と同範瓦の伝播、また、技術的伝播がどの地域まで忠実に行われていたか、わかるであろう。なお、最後になりましたが、本稿をまとめるにあたって奈良国立文化財研究所 飛鳥藤原京発掘調査部の上原真人氏、花谷 浩氏、大脇 潔氏、亀岡市教育委員会の樋口隆久氏、亀岡市文化資料館の中澤 勝氏、当センターの森下 衛氏にはたいへんお世話になった。ここに記して感謝の意を表します。

(しば・あきひこ=当センター調査第2課調査第1係調査員)

注1 足利健亮氏は『新修 亀岡市史』本文編第一巻の中で、「奈良時代までの道は、馬堀付近で大堰川を北へ渡り、保津から北北西を指して池尻付近に至るルートをとどった。」と述べている。(第四章 律令体制の成立 第五節 古山陰道の変遷)

注2 田代 弘「池尻遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第48冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992

注3 柴 暁彦「池尻遺跡第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第58冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994

注4 四天王寺出土の瓦には、無子葉弁十六葉蓮華文軒丸瓦がある。この瓦の外区には珠文が施されており、類似点が認められる。『四天王寺』-食堂跡-(食堂再建計画に伴う発掘調査報告書)

- 大谷女子大学資料館報告書 第15冊 大谷女子大学資料館) 1986
- 注5 上原真人氏のご教示による。
- 注6 『周山瓦窯跡発掘調査報告書』 京北町教育委員会 1981
- 注7 水谷寿克ほか「千代川遺跡第6・7次」(『京都府遺跡調査概報』第14冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
- 注8 樋口隆久「観音芝磨寺発掘調査報告」(『亀岡市文化財調査報告書』第20集 亀岡市教育委員会) 1988
- 注9 花谷 浩氏のご教示による。
- 注10 森下 衛 「亀岡市与野磨寺採取の古瓦」 (『京都府埋蔵文化財情報』第13号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984

参考文献

- 「飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅰ」 小墾田宮推定地・藤原宮の調査 (『奈良国立文化財研究所学報第27冊』 奈良国立文化財研究所)1976
- 「奈良国立文化財研究所基準資料」Ⅳ(奈良国立文化財研究所)1977
- 「平城宮出土軒瓦型式一覧」(奈良国立文化財研究所)1978
- 坪之内 徹「畿内周辺地域の藤原宮式軒瓦 一讃岐・近江を中心にして」 (『考古学雑誌』 第68巻第1号) 1982
- 坪之内 徹「藤原宮式軒瓦とその分布」(『日本書紀研究』第十一冊 塙書房刊) 1979
- 「新修 亀岡市史 本文編第一巻」(亀岡市史編さん委員会) 1995